

宮ノ下遺跡出土土器の再評価

大石 雅興

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 宮ノ下遺跡出土土器の再評価

大石 雅興

## 1. はじめに

京都府京丹後市(旧網野町)に所在する宮ノ下遺跡は、1957年6月に同志社大学考古学研究室によって発掘調査が行われた。しかし、その調査成果については十分な報告がなされておらず、出土遺物の一部が岡田茂弘氏によって報告されているのみであった(岡田1957)。筆者は、同志社大学大学院に在学中、宮ノ下遺跡の報告書執筆を通して、出土土器の分析を行った(水ノ江・大石2020)。

宮ノ下遺跡出土土器は、資料が十分に公開されないにもかかわらず土器編年の標識資料に位置付けられ、「宮ノ下Ⅰ式・宮ノ下Ⅱ式」が岡田茂弘氏により設定された(岡田1965)。

宮ノ下Ⅰ式・宮ノ下Ⅱ式土器は、山陰の菱根式土器と同様に、表裏縄文を特徴とした土器であり、縄文時代早期後葉から末葉に位置付けられている。丹後においては、縄文時代早期後葉に位置付けられる遺跡が少ない(第1図)。そのため、宮ノ下遺跡出土土器が近畿北部から山陰、北陸まで、日本海沿岸における当該期の土器編年を考える上で非常に重要な位置を占めている。しかし、宮ノ下遺跡出土資料の大半が未報告なまま型式設定が行われたことが、近畿北部における編年研究の進展を阻む大きな要因となっている。

小論では、これまで報告されている宮ノ下遺跡出土土器に加え、京都府立網野高校が発掘し、現在京都府立丹後郷土資料館に所蔵されている未報告資料を合わせて概観し、宮ノ下遺跡出土土器の編年的位置付けを再検討する。



第1図 丹後の縄文時代早期後葉～末葉遺跡位置

## 2. 宮ノ下遺跡出土土器についての研究史

岡田茂弘氏は宮ノ下遺跡の発掘調査成果から、宮ノ下遺跡出土土器を分類し考察を加えた。その中で、表裏縄文土器、関東の茅山式に類似する土器が出土するとし、宮ノ下遺跡の出土土器が早期後半に位置付けられること、石山貝塚出土の表裏縄文土器と縄文原体に差があることなどを検討した(岡田1957)。その分類は以下の通りである。

第一類 押型文土器(楕円押型文)  
(第2図1)

第二類 条痕文土器(第2図2、3)

A 縦走条痕文(第2図2、3)

B 横走条痕文(第2図4、5)

C 斜行条痕文(第2図7)

第三類 節の不明瞭な縄文(第2図14)

第四類 組紐縄文(第2図9)

第五類 羽状縄文(第2図10)

第六類 単節斜行縄文

A 表面に縄文、裏面に条痕文を有する(第2図6、8)

B 表面に縄文を有するのみ(第2図11、12、15)

C 表面、裏面どちらにも縄文を有する(表裏縄文)(第2図13)

第七類 茅山式系土器(第2図16)

第八類 無文土器



第2図 岡田茂弘氏による分類

1957年の報告を踏まえ、岡田氏は1965年に宮ノ下I式と宮ノ下II式を設定した(付表1)。その中で岡田氏は、「宮ノ下遺跡には上下2層の遺物包含層が存在したが、下層より、外面に無節または単節縄文をほどこし、内面を植物茎による条痕で仕上げた平底の繊維土

器(宮ノ下Ⅰ式)が出土し、上層から、内外面に単節縄文をほどこした、おそらく尖底の繊維土器(宮ノ下Ⅱ式)が出土している。」(岡田1965)としており、底部形状と内外面の調整・文様を基準に宮ノ下Ⅰ式と宮ノ下Ⅱ式を分類している。

1965年の論考において、出土層位に関しては、宮ノ下Ⅰ式が下層、宮ノ下Ⅱ式が上層より出土していると述べている。しかし、この上層・下層と言う表現について、1957年の報告では宮ノ下Ⅰ式に相当する第六類Aが黒色粘土層下部から多く出土、宮ノ下Ⅱ式に相当する第六類Cが黒色粘土層上部からのみ多く出土とされている。整理段階で層位の認識に変化があったことが見受けられるが、当時の記録に乏しいためその詳細は不明である。

伊藤今日子氏は岡田氏の分類に応じて、丹後郷土資料館所蔵資料の紹介と分類を行った(伊藤1984)。その上で、宮ノ下Ⅰ式、宮ノ下Ⅱ式とされている土器を近畿北部、北陸、山陰の遺跡において検討し、宮ノ下Ⅱ式が押型文土器と羽島下層Ⅰ式土器の間に位置し、早期中葉をやや下るのものであるとした。以上が宮ノ下遺跡出土土器についての代表的な論考である。

宮ノ下式土器の研究における最大の問題点は、基準資料となる宮ノ下遺跡出土土器が長らく報告されていなかったことであった。筆者は、同志社大学考古学研究室が所蔵する資料の整理報告を行った。その過程で、宮ノ下式の型式設定についての課題を見出した。

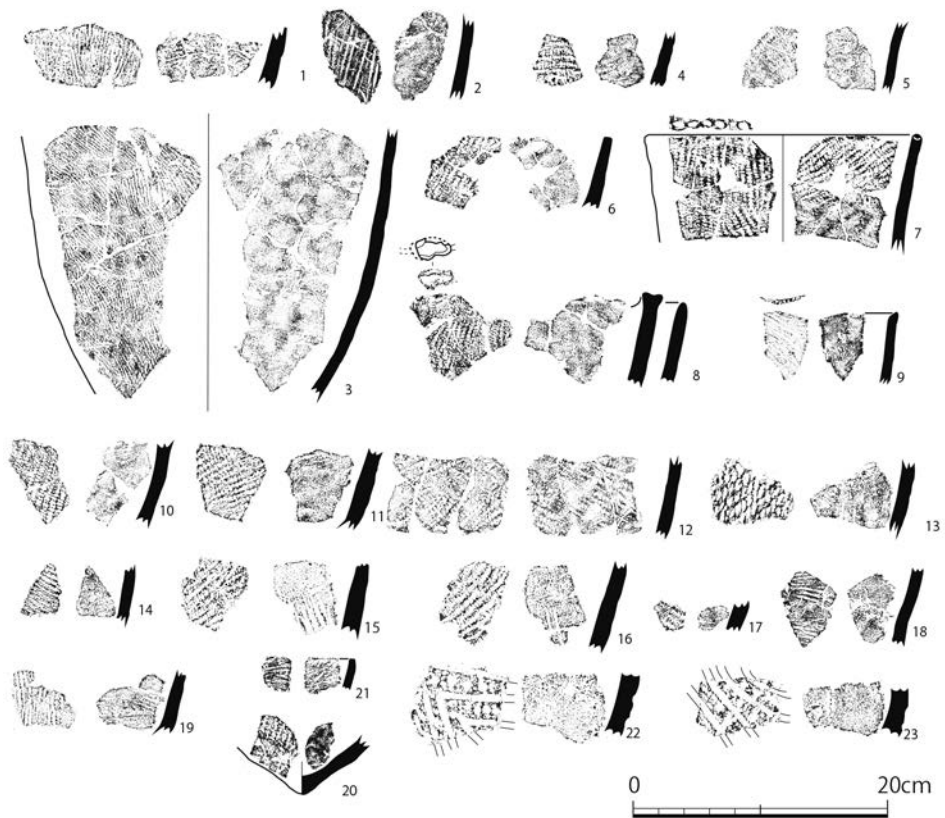
### 3. 宮ノ下遺跡出土土器の分析

宮ノ下遺跡出土資料は現在、同志社大学、京都府立網野高校、京都府立丹後郷土資料館にそれぞれ収蔵されている。その来歴はそれぞれで、それらの資料を総括した検討はこれ

	近畿中央部	近畿北部	近畿東・南部	瀬戸内
早期	神宮寺 大川 (尾上) (福本) 高山寺 穂谷 石山Ⅰ 石山Ⅱ 石山Ⅲ 石山Ⅳ 石山Ⅴ 石山Ⅵ 石山Ⅶ	(+)	(+) (+) (+) (+) (+) (+) (+)	黄島       羽島下層Ⅰ
	安土N上層 北白川下層Ⅰa 北白川下層Ⅰb 北白川下層Ⅱa 北白川下層Ⅱb 北白川下層Ⅱc 北白川下層Ⅲ 大蔵山	(鳥浜Ⅰa) (鳥浜Ⅰb) (鳥浜Ⅱ) (鳥浜Ⅲ) (鳥浜Ⅳ) (+) (+)	(+) 丸田 (+) (+) (+) (+) (+)	羽島下層Ⅱ 羽島下層Ⅲ  磯ノ森 彦崎ZⅡ 田井
	(粟津) 醍醐Ⅱ 醍醐Ⅲ・星田 (天理C・番ノ面)	(+) (+) (平CⅢ)	(+) (+) (+)	船元 里木Ⅱ 福田C
	天理K (+) 北白川上層・稲口 一乗寺KⅠ 元住吉山Ⅰ 元住吉山Ⅱ 宮滝	浜詰KⅠ・平KⅠ 浜詰KⅡ (+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+) (+)	中津 福田KⅡ 彦崎KⅠ 彦崎KⅡ 福田KⅢ
	滋賀里 (丹治) 樫原 船橋	(+) (+)	(+) (+) (+)	黒土BⅠ 原下層 黒土BⅡ

(+)は中央部と同一形式の存在をします

付表 岡田茂弘氏による土器編年



第3図 同志社大学所蔵資料(1/6)

まで行われてこなかった。今回、それらの宮ノ下遺跡出土資料を俯瞰的に検討し、その位置付けを明確にする。

同志社大学所蔵資料(第3図) 同志社大学考古学研究室が1957年に発掘調査を行った際の出土土器は、コンテナで約2箱分存在する。一部は台帳などにより出土状況が特定できるが、出土層位・グリッドが不明なものが大半である。

宮ノ下遺跡で出土する土器は、条痕調整を行ったのち、LR縄文を施文するものがほとんどである。その一部は「表裏縄文土器」と言われるように内外面両方に縄文を施文するものである。宮ノ下式の代名詞とも言える表裏縄文土器だが、その数はあまり多くはなく、内面の施文は口縁部付近に限られる。内面の条痕調整はナデ消されているものが多い。2層の包含層より出土した土器と、出土層位が不明ながらも特筆すべき特徴を持つものについて検討する。

下層である灰褐色粘土層から、表裏縄文土器は出土していない。外面の条痕調整を撫で

消さずに残すものが出土する(1、2)。外面にのみ縄文を施すものが多く、内面の調整は撫で消されている(3～6)。口縁部片(6)も出土しているが、内面に縄文は施されていない。

灰褐色粘土層と比較すると、上層にあたる黒色粘土層は土器の出土量が格段に多い。そのほとんどが胴部片であるが、口縁部片も一部出土しており、底部に関しては尖底のものが1点のみ出土している(20)。口縁部は全て端部に刻みが施される(7～9)。口縁部に皿状突起を持つ、東海の粕畑式の影響を受けたと考えられるものが1点出土している(8)。内外面の調整・施文のバリエーションも多岐にわたる。大部分を占めるものは外面にのみ縄文を施しているものであり、内面の調整は撫で消されている(10、11)。縄文本体には2段のLRがほとんどであり、大きな違いは見られないが、一部に原体幅が極端に太いもの(13)や細いもの(14)が見られる。外側に縄文を施し、内面に太い沈線を施すものも数点出土している(16、17)。内外面に縄文を施す表裏縄文土器(12)は全てこの黒色粘土層より出土している。条痕調整を残す土器は、外面に縄文を施し、内面の条痕調整が残るもの(17)、内外面ともに条痕調整を行ったのち、内面の条痕調整を撫で消したもの(18)、内外面どちらにも条痕調整を残すもの(19)の三種類が存在する。

注記がされていないなどの理由で出土層位が不明な土器が一定数存在している。その中で特筆すべきは茅山式系の土器(22、23)が2点出土していることである。この土器は岡田氏の報告の中でも出土層位が不明だが、おそらく黒色粘土層下部であろうとされている。

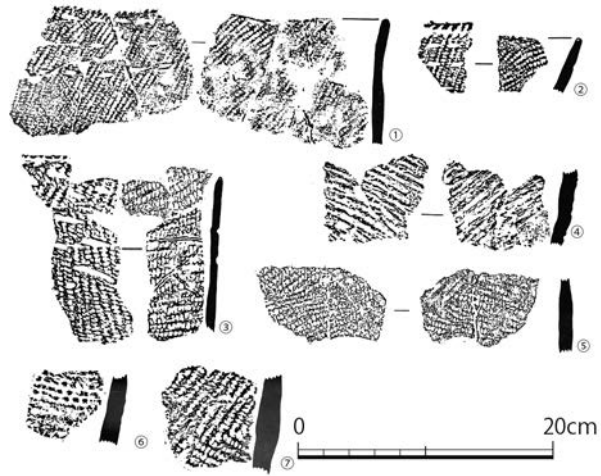
京都府立網野高校所蔵資料(第4図) 同志社大学考古学研究室による発掘調査のほか、宮ノ下遺跡では地元の京都府立網野高校の教諭と学生数名による遺物の採集と発掘調査が行われている。大部分は京都府立丹後郷土資料館に寄託されているが、一部は網野高校に所蔵されており、総数20点を数える。発掘当初の状況が不明で、出土層位は不明である。裏面に「5」、「6」、「7」のシールが貼られているものがあり、収蔵する木箱の番号であると考えられるが、その分類基準は不明である。表裏縄文土器は3点確認でき(24～26)、そのほかは表面にのみ縄文が施されているか、条痕調整が残されている。いずれも内面は丁寧に撫でられているものがほとんどである。特筆すべきは底部であり、同志社大



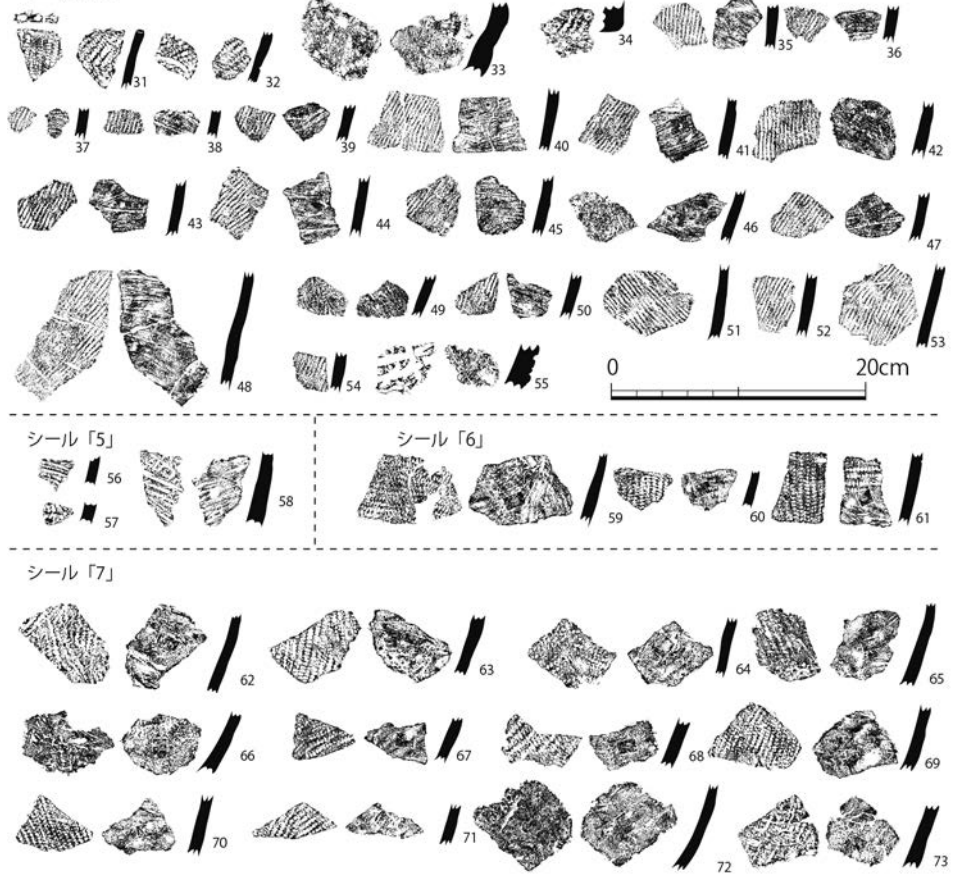
第4図 京都府立網野高校所蔵資料(1/6)

学所蔵資料と違い、平底のもの(27~30)しか存在しない。

京都府立丹後郷土資料館所蔵資料(第5・6図) 網野高校によって発掘調査が行われた出土土器の大部分は現在、京都府立丹後郷土資料館に寄託されている。伊藤今日子氏はこれらの資料の一部を利用し検討を行っている(第5図)。これらの土器にも裏面に「4」、「5」、「6」、「7」の分類シールが確認できシールなし



第5図 伊藤氏報告の丹後郷土資料館所蔵資料(1/6)



第6図 丹後郷土資料館所蔵資料

る。その概要は基本的に同志社大学所蔵資料・網野高校所蔵資料と同様であるが、同志社大学所蔵資料では行方不明となっている高山寺式の押型文土器(⑥)が1点確認できる。しかし、この資料でしか見られないものが、表裏縄文でその上から外面に竹管状工具によるものと思われる短沈線を施すものである(①~③)。短沈線は3段を基本としており、口縁部付近を全周するものと考えられる。短沈線を施すものは基本的に口縁部に刻みを有することも特徴の1つである。もう1つの特徴は、(35~54)に代表されるような縄文原体が細く、厚みが6~7mmのものがまとまって存在している点である。これらの資料は「1995.6 宮ノ下 No.4」のラベルが貼られた収蔵箱にまとめられており、当時分類されたものであると考えられる。同志社大学所蔵資料の茅山式系土器(22、23)と同じ特徴を持つものも1点確認できる(55)。同志社大学所蔵資料とは、この特徴を持つ資料、口縁部付近に短沈線を3段施す資料、平底の底部が存在する点で異なった特徴を示している。

#### 4. 宮ノ下遺跡出土土器の再評価

縄文時代早期後葉から末葉の土器編年研究において、1965年段階に設定された宮ノ下Ⅰ式、宮ノ下Ⅱ式は当初から研究の中心で議論されてきた。しかし、型式設定当時は編年に使用された資料の提示が不十分であり、長らくその根拠が曖昧なまま「表裏縄文」という要素が一人歩きしてきた。内外面の縄文施文、底部の形状、出土層位の別から型式設定を行った宮ノ下Ⅰ式、宮ノ下Ⅱ式であるが、資料の限られた時代に少ない要素から設定された編年であるということを改めて認識しなければならない。

宮ノ下遺跡出土資料は細片がほとんどであり、口縁部から底部までが残存する資料は1点も確認できない。加えて、出土層位が明確にわかる資料も一部のみで、その大半は出土層位不明のものである。

最も大きく取り上げられる要素の縄文施文についても、宮ノ下遺跡の資料のみで年代差を見出すのは難しい。内外面どちらにも縄文が施される場合、(7)に見られるように内面の施文範囲は口縁部付近に限られる。底部形状に関しては、宮ノ下遺跡出土資料の中に平底、尖底の底部がそれぞれ出土しているが、出土層位がわかるものはその中で尖底の1点のみ(20)である。その他はほとんどが平底であり、全て出土層位は不明である。

岡田氏は内外面の縄文施文、底部形状、出土層位を基準に宮ノ下Ⅰ式と宮ノ下Ⅱ式を設定しているが、先述したように、縄文施文と底部形状の相関関係を見出すことは困難であり、出土状況に関しても不明なものがほとんどである。

近年の研究において、岡田氏が想定した型式変化は妥当であると評価されている。特に、外面のみの縄文施文から内外面への縄文施文へという要素はその後の研究に大きな影響を



与え、現在の編年研究の土台となっている。

しかし、標識遺跡である宮ノ下遺跡において、宮ノ下Ⅰ式から宮ノ下Ⅱ式への型式変化がはっきりと追える資料は確認できない。口縁部の縄文施文についても、型式学的な推移は考えられるが、他の属性との型式学的検討や層位学的検討で編年を検証することは困難である。

宮ノ下遺跡出土資料を指標とした宮ノ下Ⅰ式・宮ノ下Ⅱ式の型式設定は現段階では困難であると考えられる。しかし、その編年の方向性は妥当性の高いものであり、他の遺跡と総合し、広域的に検討することで、より実証性の高い編年が構築できよう。

#### 5. おわりに—今後の課題と展望—

今回、未報告となっていた京都府丹後郷土資料館所蔵の資料の報告と分析を行った。それらを含めて3カ所に所蔵保管されている宮ノ下遺跡出土資料を総合して検討できたことは大きな成果と言える。丹後では浦入遺跡や裏陰遺跡など、良好な資料が報告されているにもかかわらず、その検討が不十分なままの遺跡が存在する。近年、北陸や山陰においても良好な資料が豊富に報告されている。近畿北部の早期後葉～末葉土器を周辺地域との比較を通して地域編年を確立するとともに、日本列島全体の中でどのように位置付けていくかが今後の課題である。

謝辞

資料調査では、京都府立丹後郷土資料館と担当者の方に非常にお世話になりました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

(おおいし・まさおき = 当調査研究センター調査課調査員)

参考文献

- 伊藤今日子 1984 「宮ノ下遺跡出土の土器」『京都考古』第35号  
岡田茂弘 1957 「京都府宮ノ下遺跡出土の土器」『貝塚(考古ニュース)』No.70  
岡田茂弘 1965 「縄文文化の発展と地域性 7 近畿」『日本の考古学』Ⅱ 縄文時代 河出書房  
水ノ江和同・大石雅興 2020 『宮ノ下遺跡 - 京都府京丹後市(旧・網野町) 所在縄文時代早期末葉遺跡の発掘調査報告』同志社大学文学部考古学調査報告第9冊 同志社大学文学部文化史学科

挿図等出典

- 第1図 筆者作成、第2図 岡田茂弘 1957、第3・4図 水ノ江・大石 2020  
第5図 伊藤 1984、第6図 筆者実測  
付表 岡田茂弘 1965 を元に筆者作成